

教養教育における協働学習の場の可視化：参加者の言語的文化的多様性を前提とした授業における試み

吉野文、西住奏子、小林聡子、ガイタニデイス・ヤニス
千葉大学国際教養学部

本ポスター発表では、多様な背景の学生を対象とする教養教育における協働学習に焦点を当て、事例を挙げながら実践を多層的に可視化する方法とその意義を検討する。学生の認知的変容、教員の仕掛けやその背景にある理論的アプローチを表現する手段、実践者間で課題を共有する手段として可視化が有効であることを主張する。

可視化とは何か、なぜ今可視化なのか

情報が氾濫する昨今、大学教育における批判的思考や多角的視点の重要性から、教養教育が再び注目されている。また、国際的な学生交流の活発化を背景に、教養教育においても言語的文化的に多様な学生を対象とした教育方法の確立が急務となっている。このような状況下で、高等教育ではアカウンタビリティや評価などがより重視されつつあり、教材やシラバスの具体化を始め、学習成果のeポートフォリオによる可視化などが注目されるようになってきている。しかしながら、本発表でいう可視化は、こうした形式的なものとは異なり、多様な手法を用いて学習過程や教員側の仕掛けを見えるようにすることを意図している。

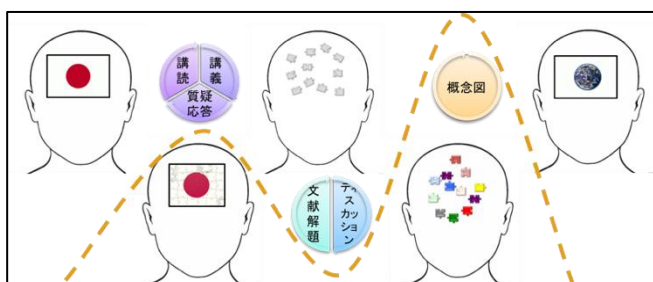
なぜ今そのような実践の可視化をする必要があるのか—まず、高等教育の市場化・形骸化への危惧である。2012年の中央教育審議会の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」以降、急速にアクティブラーニングの技法として、協働学習 (collaborative learning) という概念が大学教育の場に浸透してきた (溝上 2014)。これまでの講義型学習から、学生の主体的な参加を求める学習アプローチが注目される一方、学習形態のみが取り入れられる状況も見られ、その内実に関する議論が未だ十分でない。

また、参加者の多様性や差異を肯定的に捉え、互惠性、対等性を志向する協働学習は、言語、文化、専門など多様性の大きい学生群に対する教育においてその強みを発揮できると考えるが、多様な学習者らが集まる教育の場では、学生個々の既存の知識や経験を表現し、共有し、協働的に取り入れる手法が求められる。講義型から参加型学習への移行からも明らかなように、教育は一方的に行うものではなく、学生と教員の対話の中で起こるもの、すなわち教育は「する」ものではなく、学習空間において「起こる」ものと捉えられる。対話や思考の可視化は、多様な学生がこのような学習空間において貢献することを可能にする手法としても適しているのではないかと考える。

可視化の事例紹介

発表では、教員の仕掛け、学生の学習過程、実践の理論的背景、実践の見せ方について、誰が、何を、何のために、どう可視化するのかというプロセスを多層的に考察していく。以下では、教員の仕掛けと実践の見せ方の事例を端的に紹介する。

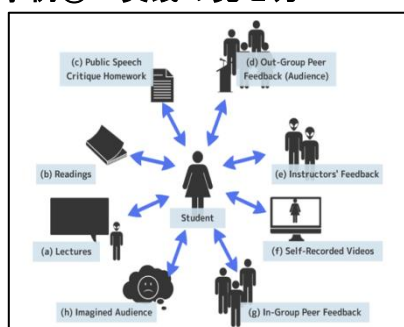
事例①：教員の仕掛け



この図はクリティカル日本学の一環として開講している教養科目「健康と病いをめぐる日本の文化」における三つの要素を表している。点線は本授業のトピックの配置と学生の理解度と認識度の変化を、円グラフは課題の評価基準とその割合を表している。また、人の頭はクリティカル日本学

の目的、「日本のイメージを分解し、自分なりに作り直すこと」を示したものである。

事例②：実践の見せ方



事例②は、上記と同じ科目群において発表者らが担当している「日本を英語でプレゼンする」という授業の基本的な構成要素を表している。教養教育における多角的視点とミハエル・バフチンの「多声」（1984）の概念とをリンクさせ、プレゼン作成の過程で、講義、想像上の聴衆、映像上の自分たちなど、多様な声や観点との対話が意識されるように組んであることを示す概念図の一部である。

協働性に向けて

本研究では、可視化自体を完成したものと捉えるのではなく、対話の中で相互作用的に変化するものであると同時に、可視化されているものの変化を表す方法でもあると考える。受け手からのフィードバックを繰り返すことで、よりよいものになり、それによって双方の理解が深まっていくというのも可視化のメリットである。つまり、単に成果物として何かを作り、達成感を得るための可視化ではなく、協働学習において学生が何を学んでいるのか、また学ぶ余地が更にあるのか、教育方法を多層的に具体化させるために可視化という手段を用いる。

協働学習を通して多様性や協働性を意識し、経験し、身体化させていくことが、現在のグローバル社会には必要である。これまで曖昧にされがちであった協働学習における理論と実践を明確に表象することで、その枠組みの再構築の足がかりとなりうる。また、このような可視化は、大学教育だけでなく言語的文化的に多様な児童・生徒が学ぶ学校教育現場に対しても示唆を与えるものとする。

参考文献

ガイタニディス・ヤニス, 小林聡子 (2015) 『『日本』をめぐるリベラル・アーツ教育の取組みとその意義—国際教育センター企画 FD 研修会 (平成 26 年 11 月 19 日開催) の記録—』『国際教育』 8: 77-102

溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂

Bakhtin, M. (1984). *Problems of Dostoevsky's poetics* (Vol. 8). Minneapolis: University of Minnesota Press.